

## ワークシート 遺跡編（中学生） 解答例

### Q1 環状配石墓

(答え)

円形。環状。円形で、縦横に規則的に石が置かれているものもある。 など

(解説)

円形に石を並べ、中央に穴が掘られた墓です。縄文時代には、住居や墓、貯蔵穴などを円形（同心円状や環状）に配置する集落があります。環状配石墓は、このような縄文人の世界観を表したものであるとも考えられます。

### Q2 南盛土

(答え)

古いものと新しいものがどのように違うのか、など土器の移り変わりがわかる。 など

(解説)

土砂や遺物は下から上へ順番に堆積するため、下が古く、上が新しく、上下の層を比較することによって、土器の模様や形、石器などの形の変化が分かります。盛土の土砂は水平に堆積しているため、土を運んだ際に整地している可能性があります。

### Q3 復元竪穴住居（1）

(答え)

茅葺き。樹皮葺き。土葺き。

(解説)

この3種類の屋根の葺き方は、北海道アイヌや北東アジアの民族の住居に見ることができます。使い方や気候、生活様式などの違いによって、いろいろな種類のあったことが推測されます。岩手県御所野遺跡で、土葺きの可能性がある焼けた竪穴住居跡が発掘されたことから、最近では土葺きで復元された竪穴住居が多く見られます。三内丸山遺跡でも土屋根の可能性がある竪穴住居が見つっています。

### Q4 復元竪穴住居（2）

(答え)

土器を利用したもの。石で囲ったもの。 など

(解説)

炉は火をたいた場所です。暖房、調理、照明など、生活するうえで重要な役割がありました。床をそのまま、炉として使用するものが多いですが、土器や石を利用したものもありました。時代によって形状や作られる場所に違いが見られます。



### いろいろな炉

#### Q5 復元掘立柱建物かくげんほったてぼしらたてもの

(答え)

地面を掘りくぼめずに柱だけで床と屋根を支えている。

高床たかゆかである。 など

(解説)

地面に穴を掘りその中に柱を立て、屋根や床を支える建物を、掘立柱建物と呼びます。多くは6本の柱が、3本ずつ2列で長方形になるものです。柱穴で囲まれた部分には、炉や固い床が見つからないことから、高床であったと考えられます。倉庫などのほかに、東側に大人の墓が続いていることから、埋葬まいそうや祭祀さいしに関する施設の可能性も考えられます。

#### Q6 大人の墓どこうぼ (土坑墓)

(答え)

列状。道路を挟んで二列に並んで向き合うような状態。 など

(解説)

三内丸山遺跡では、道路に沿って列状に並ぶという特徴があります。縄文時代には、地面に穴を掘って遺体を埋めるという方法が一般的で、墓の形は小判形のものが多く、埋めた後に小山がつくられるものや、大きな石をのせるものがあります。副葬品は土器のほか、石器がよくみられ、石鏃がまとまって出土する例や、ヒスイのペンダントが出土した例もあります。

#### Q7 北の谷

(答え)

**食生活。自然環境。**

(解説)

木の道具や動物・魚の骨、植物の種が見つかったことから、当時の環境や食生活を知ることができ、縄文時代の人達も私達とあまり変わらないものを食べていたことがわかりました。ブリやサバは頭の骨が見つかっていないので、加工されたものが持ち込まれていたことが考えられます。

#### Q8 北盛土

(答え)

**地面に敷き詰められたように。隙間なくびっしりと。 など**

(解説)

この場所には、土だけではなく、土器などの遺物が多く捨てられていました。土器はつぶれたものがいくつも広がっています。展示されている土器は、縄文時代中期中葉(約 4500 年前)の円筒上層 d 式とよばれているものです。



円筒上層 d 式土器

Q9 子どもの墓（埋設土器）

（答え）

土器

（解説）

子どもは土器に入れられて埋められました。現在までに約 880 基みつかり、大人の墓とは別の場所に集中しています。土器は、日常使用するもので、口縁部を打ち欠いたり、底や底付近に穴をあけたりするものもあります。中からは、すり石などに使われた、握り拳くらいの大きさの石がよく出土します。

Q10 おおがたほったてぼしらたてものあと  
大型掘立柱建物跡

（答え）

約 4.2m

（解説）

この大きな柱穴は、6 基みつき、3 基が 2 列に並んでいました。柱の間隔はすべて約 4.2m であり、縄文時代にも、長さの単位があったものと考えられています。穴に残っていた柱の下の土に、どれだけの重さがかかっていたのかを調べた結果、直径 1 m ほどのクリの木で、高さは最大で 23～25m の柱が建てられることが推定されました。

Q11 復元大型掘立柱建物、復元大型竪穴住居

（答え）

クリ

（解説）

三内丸山遺跡では、遺跡の内外にクリ林が広がっていたと考えられています。当時の人々にとって、クリは食料としてだけでなく、住居などをつくる木材や、燃料の薪としても使われました。クリは堅く、水に強いので、建物が長持ちするという特長があります。

Q12 復元大型竪穴住居

（答え）

長さ＝約 32m 幅＝約 9.8m

（解説）

床面積は 250 m<sup>2</sup>ほどで、畳にして 150 畳以上あり、普通の竪穴住居の約 30 倍の大きさです。集落の中心に位置することから、共同住宅、作業場、集会場などの説があります。